

萌芽的読書としての幼児の自発的な絵本読み

ー 5 歳児クラスのエピソード記述による探索的研究ー

金 娟鏡 [鹿児島大学教育学系 (家政教育)]

Preschoolers' initiative illustrated book reading as emerging reading : Searching study by episode description in a 5 year old class

KIM Yeonkyeong

キーワード：幼児、絵本、萌芽的読書、エピソード記述

【問題と目的】

絵本は子どものための文化財であり、子どもが初めて出会う「本」である。しかしながら、大人のための文字本とは異なった特質をもつ。正置（2013）によれば、絵本は「絵」と「文字」とページめくことによってストーリーが展開される総合芸術であり、子どもにとって絵本を読むことは、新しい世界の疑似体験となるのである。

ところで、多くの子どもは文字を覚え始める頃までは、絵本の「絵」を注視しながら、大人が文字を「読み聞かせる」ことによって絵本を楽しむようになる。この読み聞かせは、家庭から始まり、幼稚園等に入園してからは一日の活動の一部として位置づけられる（図1）。

横山・水野（2008）は、幼稚園での絵本の読み聞かせに関する調査を行い、読み聞かせの多くは降園前や昼食前に行われていること、読み聞かせの中で幼児から発話があった場合は、保育者は眼前の幼児の反応を見ながら即興的に対応し、自身の意見を述べるよりも、幼児の発話を繰り返し、

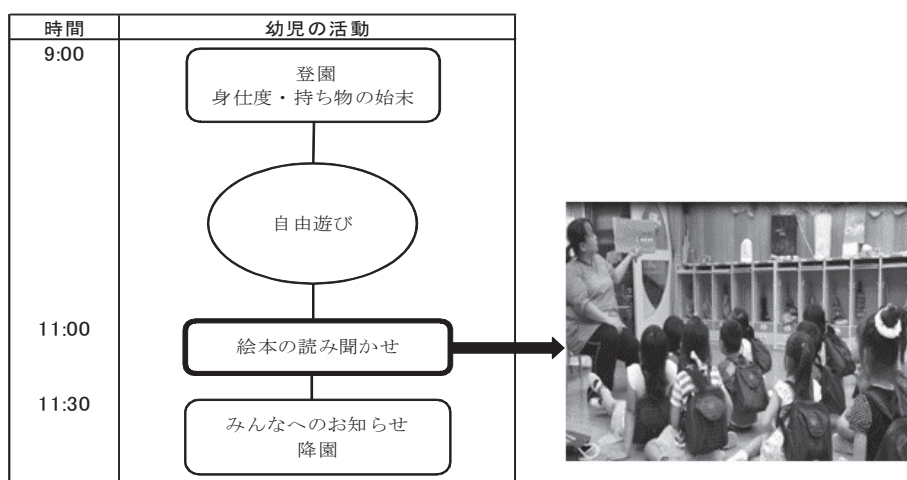


図1 幼稚園の一日（午前保育）と絵本の読み聞かせ

全員が共有できるようなやりとりをしていることを報告している。また、松居（2002）は幼稚園での読み聞かせは、絵本の内容や他児の考えを共有する認知的意義のみならず、みんなと「共に味わう」といった一体感を高め、心の歓びにつながる情動的意義が大きいと述べている。

秋田（1997）は、絵本の読み聞かせに関する研究を概観した上で、幼児期の絵本の読み聞かせは児童期以降の読書活動を持続していくための認知的・情動的土台となるとし、「萌芽的読書」として位置づけている。具体的には、読み聞かせから読書へ移行する過程をスクリプトの内化という概念を用いて、①まず、絵本の読み聞かせという形で、幼児は読むという活動に参加し始める。②その中で、絵本の構成、物語の構造、文字の読みに関する知識など、読むことの核となる認知的操作の知識を得る。③そして、多様な絵本の読み聞かせ経験の蓄積を通じて、読むことへの内発的動機づけを高められる。④やがて、一人で本が読めるようになる、と説明している。

しかしながら、秋田の説明では、次の点が考慮されていないと考えられる。佐々木（1993）は、絵本は幼児の自由な選択のもとに楽しめるべきものであり、読み聞かせだけでなく、遊びの中で幼児が自発的に絵本を読もうとすることにも注目すべきだとしている。実際に、幼稚園の保育室には、ゾーンと呼ばれる幼児の活動の広がりをもたらす流動的な空間（藤森，2010）が設けられており（たとえば、製作ゾーン、ごっこゾーンなど）、絵本を介して幼児の活動の広がりをもたらす絵本ゾーンが用意されている。幼児は遊びの中で自ら絵本ゾーンに入り、絵本を選ぶことが可能である。また、大人のように正確に文字を読むことはできないにせよ、絵本の中の絵を見る、または文字を見る行為なども絵本を読むこととして包括的に捉えたと、遊びの中で見られる幼児の自発的な絵本読みを、大人による読み聞かせとともに幼児期の「萌芽的読書」として位置づけることができる（図2）。

ところが、大人による読み聞かせに関する研究は数多く行われているが、幼児の自発的な絵本読みに焦点を当てた研究は、情報処理の視点から眼球運動との関連を取り上げたもの（三根・汐崎・國本・石田・倉田・上田，2005）の他にはあまり見当たらず、「萌芽的読書」の一形態である自発的絵本読みが遊びの中でどのように現れるのかを明らかにすることが必要であると考えられる。

そこで本研究では、自由遊びに見られる幼児の自発的な絵本読みを探索し、その様相を考察していくことを目的とする。その際、実際の遊びの中での現象に迫るための方法として、エピソード記

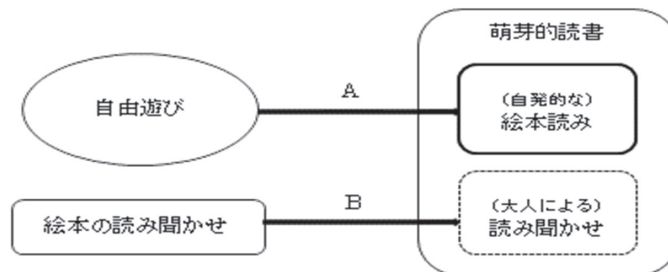


図2 幼稚園での活動と萌芽的読書の関連
（Aは本研究で取り上げる枠組み、Bは従来の研究の枠組み）

述（鯨岡，2005）を用いる。エピソード記述は、従来の定量的分析では捉えられなかった、生の断面に生まれるその場の「生き生き感」や「息遣い」を描き出すことができ、自発的に絵本を読む幼児のアクチュアリティをあるがままに捉えることに適している。もう一つ、本研究では5歳児クラスを観察対象とする。その理由として、5歳児は幼稚園でのさまざまな活動を1年以上（3年保育の場合は2年以上）経験し、友達との関わりの中で自分の意思を自覚的に捉えることができること、また文字に関する興味・関心が高く（横山，2013）、そのため絵本を読むことに対しても自発性が現れやすいと考えられたからである。

【方法】

1. 観察対象：鹿児島市内のA幼稚園5歳児クラス（34名）を対象とした。クラスは担任と副担任2名が担当し、遊び中心の自由保育を行っている。

2. 観察期間：2014年4月～7月、各月2回～3回（ただし、4月と7月は1回）計7回。いずれも午前保育の日（9時登園～11時30分降園）で、自由遊びの始まりから終わりまで、絵本ゾーンを中心に参与観察を行った。保育室の絵本ゾーンには、大きなホワイトボードの下部に週替わりで数冊の絵本が用意されていた（図3）。

3. 観察方法：保育には参加せず、「大学から（幼稚園に）お勉強に来た人」という立場で、遊びの動線を防げない範囲内でポジションを取りながら、ビデオ撮影を行った。また、必要に応じて随時メモを取り、観察終了後に補足の内容も含めてフィールドノーツに記録した。

4. 分析方法：各回の観察記録から、幼児が自ら「絵本のページをめくる」「絵または写真を見る」「絵または写真を指さす」「文字を見る」「文字を指さす」「声を出して文字を読み上げる」のいずれかに該当する場面を含んだものをエピソードとした。



図3 保育室の絵本ゾーン

【結果と考察】

記述された各エピソードは、社会的相互作用も含んだ遊びの中で得られたことから、自発的な行為の視点だけでなく、他児との相互作用の視点をも併せて分類を試みた。その結果、3つのカテゴリーが抽出され、他児との相互作用が見られず一人で読む「一人読み」、他児との相互作用は見られるが一人で読む「並べ読み」、他児との相互作用が見られ、交互に読み合う「代わりばんこ読み」と名づけた。

なお、エピソードの考察については、「いま・ここ」を幼児と共有した参与観察者（福崎，2002）として、「間主観的」に寄り添う立場（内藤，1997）から行った。

一人読み

＜エピソード1＞

Y君が怒った顔でテラスから保育室の中に入る。絵本ゾーンに用意されたテーブルに座るやいなや手に持っていた（ティッシュペーパーの芯をガムテープで繋ぎ合わせた）剣をテーブルの上に投げつけ、（ソフトカバーの）絵本を手取る。表紙をめくって見開きの右の絵を見るが、突然、開いたままの絵本をテーブルの角に数回叩きつける。

しばらくして、再び見開きの右の絵を見始める。黙々とページをめくり続け、最後のページまでめくり終えると、先ほどテーブルの上に投げつけた剣を手に取り、落ち着いた表情でプレイルームへ向かって走って行く。

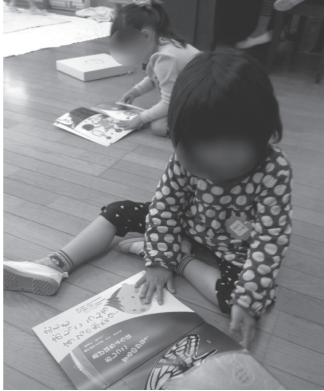


エピソード1の「一人読み」は、一人で絵本ゾーンに入った幼児が絵本を手にとるところから始まっている。Y君は絵本ゾーンに入る直前まで戦いごっこをしていたようで、戦いの道具の「剣」をテーブルに投げつけるだけでなく、手に取った（ソフトカバーの）絵本をテーブルに叩きつけ、モノを介した怒りの情動表出を示した。ところが、絵本のページをめくり続け、絵本の内容に集中しているうちに怒りの情動が減衰し、絵本を読み終わった頃は落ち着いた表情で絵本ゾーンから出て行ったのである。

一人で絵本を読むことは個人的な行為であり、他児との相互作用がない代わりに、絵本との心内対話が生じやすい（秋田，1997）。また、Wolf & Hicks（1989）によれば、幼児は絵本が描く物語世界に身を置いて、時には参加者となったり、あるいは観察者として現実世界から物語世界を眺めたり、また物語世界から現実世界に戻ってみるといったように、場面に応じていろいろな心理的距離を取っているという。Y君に見られた情動の変化は、「一人読み」という形態と、絵本の場面へ

の自己没入により心理的距離を調整（レビンの場理論によれば、心理的な場の転換）したことによるものと考えられる。

並べ読み



＜エピソード2＞

A ちゃんは中腰になって、絵本ゾーンのテーブルに顔を近づけ、仕掛け絵本を読んでいる。女の子同士が向かい合って手をつないでいる絵を見ると、小さい声で「ありがとうお、ありがとうお」という。次のページには、お好み焼きの生地の写真が出てくる。「いち、にの、さん、できた!」。2枚重ねになっていたページをめくると、こんがりと焼き上がったお好み焼きの写真が出てくる。

A ちゃんの様子をみかけた K ちゃんと M ちゃんがやってきて、A ちゃんの左後ろから「何しているの?」と聞く。A ちゃんは「これ」と絵本を見せながらページを閉じる。A ちゃんが読み終えた仕掛け絵本を K ちゃんが手に取り、テーブルから少し離れた床に座る。M ちゃんも別の仕掛け絵本を手に取り、K ちゃんの斜め横に並んで座る。二人はそれぞれ表紙をめくり、絵を見始める。

エピソード2の「並べ読み」は、一人の幼児が絵本を読んでいるところから始まっている。しかし、エピソード1とは異なり、A ちゃんが一人で読んでいるところを見かけた他の幼児たちとの社会的相互作用が見られた。A ちゃんが読み終えた仕掛け絵本を次は K ちゃんが読み始め、さらに M ちゃんも同じ種類の絵本を並んで読み始めたことは、A ちゃんがモデルとなった同型的模倣による絵本読みの社会的促進ともいえる。

同型的模倣による遊びの広がりを「遊びの伝染」というが、一人の幼児が開始した絵本読みが同型的模倣によって他児へ広がっていくことを「絵本読みの伝染」と呼ぶことができる。こうした「絵本読みの伝染」は、目に見える形で「同じこと」をしていることを互いに意識させ、共通の体験として情動の共有につながると考えられる。

代わりばんこ読み

＜エピソード3＞

I ちゃんと M ちゃんがテーブルに絵本を広げて読んでいる。I ちゃんと M ちゃんがテーブルに絵本を広げて読んでいる。「きゅうひゃくきゅうじゅうきゅうひきのきょうだいのおとうと」と、

Iちゃんが指で文字を追いながら読んでいると、Mちゃんの目もIちゃんの指先の字を追っている。そのページを読み終えると、次はMちゃんが前かがみになって読み始める。「きゅうじゅうきゅう、違う！じゅうはっぴきのきょうだいには毛が生えました。でも、小さなオタマジャクシはまだ手が生えていません」Iちゃんは同じページの下絵を指し、「ほら、ここに」というと、Mちゃんも軽く頷き、しばらく絵をじっと見る。Mちゃんが「ここに生えているよね」というと、Iちゃんは「ちいさいね」という。Mちゃんが読み終わると、二人は立ち上がる。



「次はIちゃんが読むんだよ」というMちゃんの声に、Iちゃんは「うん」と答える。ページをめくるMちゃんの手、Iちゃんの手が重なる。次のページでIちゃんは絵を指しながら、「おい、みて！お手手も生えたんじゃん。お顔に生えてる」と笑う。Mちゃんが「うん、ここだよ」と文章が始まる場所を指さすと、Iちゃんが読み始める。「きゅうひやくきゅうじゅうはっぴきのきょうだいは、カエルになりました」。今度はMちゃんがページをめくり、読み始める。「おにいちゃん」と書かれたところで、MちゃんとIちゃんの声が重なる。

エピソード3の「代わりばんこ読み」は、二人の幼児が1冊の絵本を一緒に読んでるところから始まっている。エピソード2では、それぞれが並んで同じ種類の絵本を読むという同型的模倣に留まったが、ここでは1冊の絵本を二人が共有し、Iちゃん→Mちゃん→Iちゃん→Mちゃんの順で、社会的相互作用としての役割交代のルーティンが見られた。ルーティンとは、やりとりの仕方を一定の型にすることであり、幼児同士のさまざまな遊びの中で見られる（瀬野，2010）。「次はIちゃんが読むんだよ」というMちゃんの誘いに、Iちゃんが「うん」とすんなりと受け入れることで始まった役割交代のルーティンは、絵本の特質上、単なる役割交代ではなく、一人は読み手となって絵本を読み聞かせ、もう一人は聞き手となって、その内容を絵と照らし合わせ確認する役割を交互に行うことで、友達に読んでもらった、友達に聞いてもらった喜びとなり、「一緒に絵本を楽しんでいる」という一体感を高める働きがあると考えられる。

さらに、一瞬ではあるが、絵本のページをめくる手が重なったり、絵本の登場人物を呼ぶ声が重なるなど、他のエピソードでは見られなかった身体や動作の重なり合いも見られた。人間関係が基本的に「身体をもったもの同士の関係」（無藤，1996）であるとなれば、こうした身体の触れ合いや動作の重なりは、絵本の内容やイメージの共有以上に、身体知として仲間であることを実感させ、互いの親密さを強めることにつながると考えられる。

【総合考察】

本研究では、自由遊びに見られる幼児の自発的な絵本読みに注目し、具体的な様相を探索した。その結果、幼児の自発的な絵本読みは、一人で絵本を読む場合は情動調整の働きを、他児の読む姿に刺激を受けて読み始めたり、他児と交互に読み合う場合は、仲間意識や互いの一体感・親密さといった情動経験につながることが示唆された。既述した秋田は、読み聞かせから読書へ移行する過程において、「多様な絵本の読み聞かせ経験の蓄積を通じて、読むことへの内発的動機づけを高められる」としたが、本研究の結果から、読み聞かせだけでなく、幼児期の「萌芽的読書」の一形態としての自発的な絵本読みも読書への内発的動機づけを高められ、読書意欲の醸成につながっていくことが推測される。

さて、最後になるが、今後の課題としては次の点があげられる。本研究では5歳児クラスの午前保育日を中心に自発的な絵本読みを観察したが、今後は午前保育以外の日も含めてエピソードを増やし、結果と考察の妥当性や信頼性を高めるとともに、自発的な絵本読みはいつ頃現れやすいのか、特にその文脈（自発的な絵本読みが出現する前後の状況）との関連についても検討する必要があるだろう。

【引用文献】

- 秋田喜代美 1997 『読書の発達過程』 風間書房
- 福岡淳子 2002 「みてて」発話からとらえる幼児の他者意識－見せたい相手はだれか－ 保育学研究 40 (1) pp.83 - 90
- 藤森平司 2010 『MIMAMORU 見守る保育』 学習研究社
- 鯨岡 峻 2005 『エピソード記述入門－実践と質的研究のために－』 東京大学出版会
- 内藤哲雄 1997 『PAC 分析実施法入門－「個」を科学する新技法への招待』 ナカニシヤ出版
- 正置友子 2013 日本における子どもの絵本の歴史－千年にわたる日本の絵本の歴史 絵巻物から現代の絵本まで－ メタフュシカ (44) pp.81 - 98
- 松居 直 2002 『絵本のよこび』 日本放送出版協会
- 三根慎二・汐崎順子・國本千裕・石田栄美・倉田敬子・上田修一 2005 眼球運動からみた子どもの絵本の読みと理解 2005 年度日本図書館情報学会春季研究集会発表要綱 p.55 - 58
- 無藤 隆 1996 幼児同士の付き合いの成立過程の微視発生的検討 人間関係学研究 3 (1) pp.15 - 23
- 佐々木宏子 1993 『絵本と子どものこころ－豊かな個性を育てる－』 JULA 出版局
- 瀬野由衣 2010 2～3歳児は仲間同士の遊びでいかに共有テーマを生みだすか－相互模倣とその変化に着目した縦断的観察－ 保育学研究 48 (2) pp.51 - 62
- 横山真貴子 2013 保育における文字環境 (6)：幼稚園5歳児の1年間の文字とのかかわり 日本教育心理学会総会発表論文集 55 p.488

横山真貴子・水野千具沙 2008 保育における集団に対する絵本の読み聞かせの意義－5歳児クラス
の読み聞かせ場面の観察から－ 教育実践総合センター研究紀要 (17) pp.41－51

Wolf, D. & Hicks, D. 1989 The voices within narratives: The development of intertextuality in young
children's stories. *Discourse Processes* 12 pp.329－351

【付記】

本研究は、日本発達心理学会第26回大会(2015)において発表した内容に加筆・修正したものである。保育観察を許可して下さった鹿児島市A幼稚園の先生方、園児の皆様に深くお礼申し上げます。